
涙のふるさと

藍玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涙のふるさと

【Nコード】

N4480G

【作者名】

藍玉

【あらすじ】

涙を流さないと誓い、自分を変えるために一人暮らしを始めた早乙女一樹。これから、新しい生活をするはずだったんだけど、あんな奴やこんな奴が絡んできてもう・・・滅茶苦茶!?

ブログ 始めのいっぽ！(前書き)

小説とかホント書くの初めてなんで、アドバイスとか指摘とかたくさんしてください！
よろしくお願いします！。

ブローグ 始めのいっぽ！

ザー…ザー…

外は朝と変わらず雨降っている…。

まるで、自分の今の気持ちを表しているようだ。

「はぁ…。」

コンコン。俺の部屋のドアがノックされる、多分美咲だな。

ガチャツ。

やっぱり美咲だった。

「一兄…。」

一兄と呼ばれたのは俺。

「一兄、昼食持ってきたけど…ここに置いておくね？」

でも、俺は返事をしない。否、返事ができない。

そう、俺は今泣いてるから。

中学3年の卒業式、俺は今まで付き合っていた彼女と別れた。俺は本気で好きで、本気で付き合ってたつもりだった…。

しかし俺たちは別れた。

彼女は暴力が大嫌いだった。

だから、俺は彼女と出会ってから一度も喧嘩をしたことがなかった。

だけど、とある奴らが彼女を妬んで変な噂を流した。

俺はそんな奴らが許せなくて・・・喧嘩になった。でも、それがいけなかった。

彼女が偶然現場を通りかかって見られたんだ。彼女は怒った。

そして俺たちは・・・別れた。

別れてからの俺はすごい荒れた。簡単に言えばグレた。

気に食わない奴がいれば殴り飛ばしたし、喧嘩を売られたら躊躇せずを買う。

そのうち、俺に近づく奴も少なくなっていくた・・・。

俺としてもそれはうれしかった。近くにいる奴、誰であろうと殴りそうな、そんな衝動に駆られることがあるからだ。

でも、休日は誰とも会わないように部屋にこもっている。

雨の日はつい、あのときを思い出して今みたいに泣きじゃくってしまふ。

でも、この涙も今日で最後。

俺は、今のこの孤児院を出て明日から別のところで暮らす。

新しい場所では、俺は変わる。新しい人生を歩むんだ。

だから、今日だけは・・・これで最後だから今日だけは泣こう。

涙を拭い振り返る、すると美咲のほかにもう二人。

そう、美咲の姉妹達。

小学生くらいの小さいのが美春、そして長身で髪が長い女性が美希さん。

「お兄ちゃん大丈夫？」

美春が心配そうに覗き込んでくる。

「ああ、大丈夫だ。俺は大丈夫。」

そう、俺はこれから新しい地に向かうのだ。大丈夫じゃないといけない。

「美春も俺がいなくなるけど頑張れよ？」

俺はさっきまで泣いていた顔で、無理に笑う。きっとひどい顔だろう。

「美春は寂しいけど、泣かないよ。だからお兄ちゃんも泣かないで・・・」

「あはは、一樹、美春に慰められてどうするのよ」

「美希さん・・・うっさい。」

そう言った俺は、リュックを持って玄関に向かう。

玄関には二人の・・・里山夫妻が立っていた。

「尚志さん、尚美さん、今までありがとうございました！」

「いいのよ、つらくなったらいつでも戻ってきていいからね？」

と尚美さんが優しい言葉を掛けてくれる。

「別に戻ってこなくていいぞ。お前の行く先で、本当のお前を見つけてこい。」

尚志さんが、厳しくも力強い言葉で俺の背中を押してくれる。

「本当にありがとうございました!!」

俺は深く頭を下げ、回れ右。

後ろを振り向かず駅に向かって歩く。

「お兄ちゃん、行っちゃったね」

「どうせ一兄のことだから、すぐにさびしくなるに決まってるわよ」

「ふふふ、そうね。さて、私たちも準備しますか」

美春、美咲、美希の三姉妹が家に戻り、荷物の準備をする・・・。

「ふふふ、一樹君の驚く顔が目には浮かぶわね。」

美希の不気味な笑い声に気づかず、一樹は新しい自分の道を歩み始めた。

ブログ 始めのいゝっぱ！（後書き）

ブログ、なんかちよつと寝る前に考えてたんで日本語的にか
しかったり、前後のつながりが変だったりしたかも・・・。
感想、アドバイス、誤字脱字の報告など待ってます！

1話 親切な人（前書き）

とりあえず、初日だけ何話か放り込んどきましょ笑

1話 親切な人

「・・・すつげー都会・・・。」

俺、さあめいつき早乙女一樹は、目の前の光景に思わずそんな言葉を零してしまつた。今まで自分が住んでいたところに比べるとんでもない光景だつた。

一樹は今まで田舎の孤児院で暮らしていたのだが、その孤児院の経営が苦しくなつてしまい潰れてしまつた。だから、今まで孤児院で暮らしていた人たちは数少ない親戚を頼つたり、俺みたいに補助金やバイトの金を頼りに一人暮らしをし始めるしかないのだ。

「あ、アパートまでの地図が・・・無い!? あれ? リュックの中にも・・・無い!」

しまったあ、入れ忘れたのか? 全然ないぞ・・・。どうしようかな・・・。

「どうしたんですか?」

俺が、リュックを抱えたまま地面に付していると、上からなにやら女性の声が。

「ん? 俺?」

顔をあげると・・・なんだ。声が大人っぽいから大人の人だと思つたけど、俺と同じくらい・・・制服着てるから高校生くらいかな?

「はい、なにやら凄く落ち込んでいたようなので、どうしたのかな

「？と」

ほえー。世の中にはこうやって人の事を心配してくれる人がまだまだいるんだな。世の中捨てたもんじゃないな。にしてもこの場合なんて対応すればいいのだろう？

1「ふつ、気にしないで下さい」とかいつてかつこよく立ち去る

2「道がわからなくて・・・」と素直に聞く。

3「地底人と会話してたのさ！」とか、意味不明な事を言ってみたりする。

・・・悩むな。普通に考えれば2だが、3も捨てがたい・・・。

「あの〜？」

はっ！いかんいかん、つついー一人で考え事する癖がついている。というか、悩むような事じゃなかったしね。

「白鷺荘つひやきんじょうつてところに行きたいんですけど、地図なくしちゃって・・・」

素直が一番。結局2を言っといた。

「白鷺荘なら、場所わかりますよ。私の友達が住んでいて良く遊びに行くんです」

まあ、おれもこれからそこに住むわけだけだな。

「もしかしてあなたも？あれ？でもあまり見たこと無い顔だけど・・・」

今日始めて磯崎に来たんだからな。見たこと無くて当然だろ。

「ああ、俺は今日磯崎に引っ越してきたから。これから白鷺荘でお世話になるんだ。」

「ああ、じゃああなたが噂の・・・？」

噂？まだ一度も来た事の無いこの町で、俺はもう噂になってるのか？やっぱり、駅前で地面に寝そべってたからかな・・・？いや、それとも・・・

「あの～？変な事考えてませんか？私の友達・・・あ、柿山由紀かきやまゆきって言うんですけど、由紀が今日新しい住人が来るって言ってたので・・・。」

「ああ、なるほどね。」

ふうむ、由紀とやら。俺の事を勝手に噂しやがって・・・。プライバシーの侵害だ！訴えてやる！

「あの、そういえば名前まだでしたよね？私、桃瀬春香ももせはるかっていいます」

「俺は早乙女一樹。ヨロシクな。」

なんか、もう知り合いが出来たぞ。幸先いいな。地図が無くなった時はどうしようかと思ったけど、良い人もいるし。磯崎はいいところだな。

1話 親切な人（後書き）

文が変だつたり、誤字脱字があつた場合報告を下さい！

2話 管理人は鬼だった！？（前書き）

見てくれてる人いるのかな？

2話 管理人は鬼だった！？

お？そんなつまらない話をしているうちに、それっぽい建物が見えてきたぞ？

「ここです。ここが白鷺荘です。」

ふうむ。一言で言えば普通。どこにでもありそうなアパートだな。

「案内ありがとね。俺はちょっと管理人さんと話してくるから・・・」

「あ、そうですか。じゃあ、私はこれで。」

と言うと、大家さんのところに歩いていく俺に手を振ってくれた。ここは笑顔で手を振り回しておこう。ん？春香の顔が赤っぽい気がする。きつと、俺が気持ち悪い笑顔振りまいたからだな。自分の親を恨むぜ。

「ピンポーン」

・・・返事が無いよ？でも、言われたとおりの時間だから出かけてたりはしてないと思うんだけどな！。とりあえず、連打してみるか。

「ピンポンピンポンピンポンピンポーン」

・・・ダダダダダッ！！

おお！？なんか凄い勢いでドアに向かってきてる気がする。

「うるせえよ！！一回やれば聞こえるっつの！」

おお！？めっちゃガラ悪い人出てきたんだけど！？髪の毛銀髪で、ピアスとかして、この人が・・・管理人かな？

「あの・・・白鷺荘の管理人ですか？」

控えめながら、一応聞いておく。つか、まじこええよ。

「ああ？そうだけど。お前誰だよ。」

「えっと、今日から白鷺荘に住む早乙女一樹なんですけど」

「ああ、お前がね・・・。悪い悪い、今昼飯食ってるからちよっと中入って待っててくれ」

なんつうか・・・こんな人が管理人って。大丈夫なのか？このアパート。

「おじゃまします・・・うわっ！」

きつたねー！部屋がカップラーメンの残骸とか、ティッシュとか、その・・・大人向けの本？とかで埋まってる。こんなところでよく生活出来るな、この人。

「ま、そこら辺に適当に座ってくれや」

ちよ、このひと床の物蹴ってスペース作ってますけど！
なにこれ、ここに座って良いつて事だよ・・・？

「ズズッズズズッ」

旨そうにラーメン食べるな！。そういえば俺、ずっと電車乗ってたから飯食ってねえじゃん。あーやべ、本当に腹へってきたわ。

「で、だ。お前が今日、ここ白鷺荘に引っ越してくる早乙女一樹で間違いねえな？」

「はい、そうです」

「俺は一応白鷺荘の管理人やってる鬼頭魔叉斗^{おにがしらまさと}だ。これから夜露死苦な」

どう考えても族かなんかやってた人にしか見えない。名前もなんかありえない感じがするし・・・なんか、凄いアパート入っちゃったかも？俺、どうなるんだろ？

2話 管理人は鬼だった！？（後書き）

つか、自分的にも早く学校の話に行きたいなーとか思ってます。

3話 新たな家と（前書き）

眠いです。今日は11時30分におきて、
なんだか頭がぼやくつと
してます^^；

3話 新たな家と

「部屋は203だ、小僧。生活に必要な物は大体揃ってると思っから気にするな。足りないものは自分で買いに行け。」

へえ、一応揃えといてくれたんだ。見かけとは違って面倒見のいい人なのかな？

「おい小僧、今変な事考えてなかったか？」

「え？いやいや何も考えてませんよ。」

「・・・そうか。じゃ、俺は自分の部屋にいるからなんかあつたら呼べ。なんもねえのに呼んだらぶつ殺すから覚悟しとけ・・・。」

「う・・・ういっす！」

・・・やっぱ怖い人だなー。

「ここが俺の家・・・」

うおー！一人暮らしが始まった感じ！なんか、メツチャわくわくしてきたー！

今なら逆立ちしたまま階段が上れそうな気がする！

「・・・早乙女君、なにやってるの？」

「うお！？」

本当に逆立ちしようと思って、両手を地面につけたところで、誰かに呼ばれた。

見上げてみると・・・！！

「春香じゃん。あれ？帰ったんじゃないの？」

そう、そこにはさっき知り合ったばかりの春香が困ったような顔して立っていた。

ちなみに今の状況は俺が階段下でクラウチングスタートみたいな格好してるのを階段の上から春香が眺めてる感じね。

「あ、今まで由紀の家にいたの。今から由紀とスーパーに買い物に行こうと・・・」

「春香ー、何やってんのー？って・・・あんた誰？」

おおっ、なんか・・・なんか出てきたー！？

って、話の流れからしてその由紀さんなんだろうけどな。

「あ、由紀。この人が早乙女一樹くん。今日、由紀と一緒にこの白鷺荘に引っ越してきた・・・んだよね？」

おおー。俺のこと紹介してくれるとは・・・春香ってホントいい奴だな。おじさん涙が出ちゃうよ。

「俺がその早乙女一樹。今日から203号室に住むことになった。同じアパートだから会う機会も多いだろうし、これからヨロシクな

」

「私は柿山由紀。201号室・・・あんたと反対の端っこだね。そこ

に住んでるよ。よろしくね。」

説明しよう！白鷺荘は1階は101～104（101は鬼頭さんとこ）で2階は201～203しかない。

つまり！俺の部屋が右の端っこで、由紀の部屋が左の端っこなのだ！イメージできただろうか？

「一樹？あんたいきなりぼつとどうしたの？」

「いやいや、親愛なる読者様にわかりやすいように説明を、と。」

「ふん？よくわかんないけど、大変なのね。」

ふつ、そのうちお前もなんか言わなくちゃ行けなくなるかもしれないんだぜ？

「由紀、そろそろ行かないとお昼のセールが終わっちゃうよ？」

「ウソ！？うわー・・・じゃ、さっさと行こう！一樹はどうするのよ。一緒に来る？」

「いや、俺はとりあえず部屋見ておきたいし。昼飯は後でどうにかするよ。」

「そうですか・・・」

・
おおっ！？俺、選択ミスったか！？春香がなんか悲しげな感じに・・・

「そ、んじゃ春香！急ぐわよー！！」

と、言っただかと思ったら、春香の手を引っ張ってあっという間に見えなくなっちゃった。

おっと、俺も自分の部屋確認してさっさと昼飯食べよ。後でコンビニでも行って買ってくるかな。

4話 銀髪な鬼妹！？

うーむ、実際に部屋の前に立って見ると改めてドキドキしてくるな．．．。

ガチャリ．．．

ドアを開けて中を見てみると．．．

「へえー、結構きれいだし広いし．．．。それに冷蔵庫や洗濯機とかまである。」

鬼頭さん、ホント揃えておいてくれたんだ。後で感謝してこようかな。

てか．．．これ、家具類何もいらないんじゃない？

腹も減ったけどなんか疲れたな．．．。寝よつかない？

「つて、ん？」

なんか、ベッドの布団がもっこりと。まるで、中になにかあるみたいに膨らんでいる．．．。

これは．．．あれか！？鬼頭さんがなんか置いていつちゃった的な？それか．．．幽霊とか、ミイラなんてことは．．．ないか。とりあえず、布団取ればわかるな。

「てりやつ！．．．．うお！？」

布団を剥ぎ取ってみればなんと中には．．．。

なんか知らない中学生くらいの少女が！てってれ〜

「って、てってれ〜 とか言ってる場合じゃねえ！！」

とりあえず、観察してみよう……。

髪は銀色で二つにしばっている……。

顔もまつげが長くて鼻もすらっと伸びてて……あれ？結構かわいい？

「困ったな……。どうしよう？」

困ったときは……困ったときは……！！

「鬼頭さん〜！！」

そうだ！さっき、自分から困ったことあったら呼べって言ってたし！！

俺はもう音速と同じくらいの速さで鬼頭さん宅に行った……。

「ピンポンピンポンピンポンポ〜ン」

ドドドッ！！

お？なんかさっきもこんなことがあったような気が？

「うるせえクソ小僧！！普通に呼べねえのか！？」

「そんなことより、鬼頭さん！大変なんですよ！」

「ああ？くだらねえことだったら、鍋で煮て食うぞ！？」

・・・俺なんか鍋で煮ても旨くねえよ！ていうか、鍋にはいらねえよ！

「なんか、俺の部屋で寝てる娘がいるんですよ！」

ふふふ・・・これは鬼頭さんもびっくりだな。

「ああ？どんな奴だ？」

「髪を二つで結んで、髪の色が・・・そう！鬼頭さんみたいなきれいな銀色でした。」

と、言うとき鬼頭さんはなんか急に疲れたような顔をしてため息ひとつ。

「はあ・・・あの馬鹿・・・！」

と言うとき、俺を押しつけて俺の部屋に・・・って、なんで若干怒ってるんですか？

って、置いていかれちゃう！

追いつくと、鬼頭さんはもう俺の部屋の中でさっきの美少女となんか言い合ってる。

「おい、馬鹿！なんでこんな場所にいるんだよ！」

「うるさい馬鹿兄！兄さんのところ臭くて死んじゃうよ！」

4話 銀髪な鬼妹！？（後書き）

んやー、一日にどれだけ投稿するとかわかんないっすね！。一日に何作も投稿すると品切れになるし、でもせっかくだからたくさん読んでほしいし…。

あ！アクセス解析したら結構な人が見てくれてることがわかりました！

ありがとうございます！

読みにくかったりしたら言って下さいね。時間があるときに直し、次からはそのようにするので。

でわでわ、また次回あいましょう^^ノシ

5話 これって同居ですよ？（前書き）

正直、最後のほう無理やりまとめたorz
文をまとめることが苦手っぽい俺ですね……
コツとかあったら教えてください！

5話 これって同居ですよ？

とまあ、色々ありまして…。

「えつと…そちら、鬼頭さんの妹さん？ですか？」

まだあんま信じられない…。だって…ねえ？この妹とこの兄貴って…。

「ああ、一応俺の妹。鬼頭…」

「鬼頭真紀おにがしらまきです 今日からお兄さんの家でお世話になりまーす」

おー…。やっぱり兄妹だったんだ。にしても、今なんか変な言葉が聞こえたような…？

「えつと…お兄さんって？」

と、俺が言つと真紀ちゃんは勢い良く俺を指差してきた。
そして、頭を下げるとうこう言ってきた。

「早乙女一樹さん！私、このまま馬鹿兄貴の家で過ごしてたらいつかゴキブリになっちゃいます！だから、お兄さんの部屋に一緒に住ませてくれませんか？」

「え…いや、まだ会ったばかりだし…。それに男と女の子が一緒にの部屋って言うのはね？」

さすがにまずいですよね？鬼頭さん」

鬼頭さんに救いを求めている。

「あ？この馬鹿妹は引き取ってくれたほうが煩くなくていいんだけどな。」

あっさり裏切られたああ！っていうか、あなたの妹でしょうが！？

「お兄さん……」

ああ、そんな目で見つめないでおくれ。そんな潤んだ目で見つめられたら僕は……

「鬼頭さんから許可が下りたら……」

「おう、持っけて持っけて。」

ちょー！俺の最後の抵抗があっさりと……！！？

「これから、お世話になるね！お兄さん」

と言うと真紀ちゃん俺にタツクル……もとい、抱きついてきた。

……なんか早くも新生活が不安になってきた。これからの生活は女の子と一緒に暮らすらしいですよ？早乙女さん。

「んじゃ、一件落着いてことで、俺は帰るな」

鬼頭さん冷たい……っていうか、真紀ちゃんあっかんべーとかしなくていいから！

「お兄さん！私たちも二人の愛の巣に戻ろう」

あー、なんかもうどうでもいいや。なるようになれっ！

部屋に着くと真紀ちゃんはソファに座って自分の隣を叩き、俺に「座れ」と促してくる。

仕方がないからとりあえず向かいのソファに座つといた。

「ええ。何で隣に座らないの？」

「いや…なんとなく…かな？」

「ま、いいや。改めて自己紹介ね！私は鬼頭真紀。一応さっきの鬼頭魔叉斗の妹だよ。」

「俺は早乙女一樹。今日、引っ越してきた新人だ。ヨロシクな。」

その後、真紀ちゃんは今魔叉斗さんところに行つて、自分の必要なものとか持つてきて・・・いわゆる簡単なお引越しみたいなことを始めた。その間、俺は近所のスーパーと言うスーパーに行つて（正直、ふざけた名前だと思った）夕飯としばらくの食材を買つて（二人前な）夕飯を作つて（二人前な）早いうちに寝た。

なんだかんだ言つていろいろあつて疲れたし、何より明日からは学校だからな。

ここらで一番大きな学園（桜葉学園）の高等部に転入する。高一なのに転入なんておかしいと思つた人？手あげて。

手下ろしてもいいですよ。この学園は初等部、中等部、高等部と分かれていて、普通の人間はエスカレーター式で中等部から高等部

にあがるから俺みたいな奴は転校生扱いになるらしい。

さて、明日も疲れる予感がするし、もう寝よう。おやすみぐぐぐ
zzz

5話 これって同居ですよ？（後書き）

ね？最後ちよつと無理矢理だったよね？
すいません。反省してます…。

それと、余談なんですけど。公立高校落ちましたw
やっちゃいましたよ^^；まあ、私立でがんばりますわ笑

6話　なんか飯作るのも楽しいな（前書き）

・・・書き溜めてたの尽きましたorz
なんか、最近アイデアが浮かばなくて・・・。
すんません><すこし更新が遅れるかもしれませんが。

6話　なんか飯作るのも楽しいな

バキッ！ ドカッ！

喧嘩をしている・・・相手は誰か良くわからない。

けど、俺が喧嘩をしている。3対1で劣勢なのにも関わらず、一人ずつ確実にして仕留めていく。この光景を俺は知っている。もうすぐ、教室のドアが開いてあいつがやってくる・・・。

「ガララッ！！」

「...夢ですかよ。朝から笑えねえよ。」

寝汗すごいかいちまったな。でも、汗よりも気になるのが一つ。多分、俺の目がおかしくなければ布団の中に何かいるんだよねー。しかも、昨日と同じような膨らみ方。という訳で、答えは一つ！！

「真紀ちゃん、何で俺の布団入ってんの！？」

とりあえず突っ込んで。どう対処するかはその後でもいいはずだ。それにしても、これ。起こすべきだよな？時間は...5時30分。やっぱ起こさなくてもいいか。シャワー浴びて朝飯作つてよ。

・
・
・

・
・
「やっぱ、日本の朝ごはんって言うたらご飯、味噌汁、焼き魚に納豆だよな。」

シャワー浴びてスッキリ爽快!!

そんでもって、朝ごはんができた俺は真紀ちゃんを起こしに行く。
一応7時だけど、まだ寝てるのかな?

「コンコン」

ドアをノックして(あれ?俺の部屋だよな?)部屋に入ってみると

「ジーツ」

なんか、真紀ちゃんに睨まれた。何故? why? what, where, who, how... もう一個あった気がするけど忘れた。

「真紀ちゃんどうしたの?俺の顔に何かついてる?」

というか、むしろ憑いてる?

「...朝起きたらお兄さんがいなかった。」

そついうと、ふっくらした頬をぶくうーっと膨らませる。可愛いな。思わずつつきたくなるぜ。

...ツンツン

つついてみた。すると真紀ちゃんはなぜか顔を赤くなり俯いてしま

った。

何かのスイッチだったのかな？

「ま、いいや。朝ごはんできたから早く食べにおいでよ？」

真紀ちゃんは「コクン」と頷くと、赤い顔のまま硬直してしまった。ま、そのうち来るだろ。

とりあえず、朝食を先に食べる…っていうのも悪いから、TVでも見て待つてようかな。

ふむふむ…今日は午後から明日の昼にかけて雨か。傘忘れずに持つてかないとな。

つと、今日の占いが始まったところで真紀ちゃんが来た。

「よっ、改めておはよう」

「おはよう、お兄さん」

というと、さっきまでの事はまるでなかったかのようにご飯を食べ始める真紀ちゃん。

あれはなかったことにしておこう。なんか、そんなオーラを感じる。

さて、さっさと飯食っちゃいますか！

そつえば、桜葉学園の制服ってどんなのか知ってる？初等部は私

服でいいらしいんだけど中等部から制服着用が義務づけられるらしい。男子の制服は普通のブレザーなんだけど、女子の制服がね。校長の趣味か知らんけど、スッゴイ可愛いんだよ。もう、言葉に表せることができないくらい!!

とか言ってるうちに、行く準備が整った。そういや、皆どこの高校なんだろう？

春香と由紀が同じところだろう？そんで…

「お兄さん？早くいこー」

「ああ…って、真紀ちゃんも桜葉!？」

「え？こちら辺にいる人は皆桜葉だと思うよ？ちなみに、私は中等部だよ」

ほほお。ってことは春香も由紀も桜葉だな。いやー。知り合いがいるってうれしいな。

「んじゃ真紀ちゃん、行こうか！」

ついに始まる俺の学校生活！期待で胸が膨らむ……!!

6話　なんか飯作るのも楽しいな（後書き）

というか、今、1000pもある宿題出されて、4月の5までにやれ
ってすごい無茶言いますよね？

どこの高校だ！！（俺の高校だ・・・。

あー・・・とりあえず、勉強も小説も、遊びもがんばりますとー！
！

7話 何で注目されんだろ？てゆうか眠いzzz（前書き）

ちつくしょー！高校の宿題。問題集だけだと思ったら

「自分の生い立ち」なんて作文も書かなくちゃいけない打なんて…。
なんて書けばいいのさ。

まず、何から書けば？書き始めがわからないっす…；

誰か教えてくださいませんか？

7話 何で注目されんだろ？てゆうか眠いzzz

「うおおおおお！でっけー！！」

と俺は叫ぶ。そりやもう馬鹿みたいに叫ぶ。

隣で真紀ちゃんが恥ずかしそうにしてるけど、そんな知ったことではない。

そのくらい学園がでけーんだよ！東京ドーム4個分らしいよ？

ちなみに、俺は今校門の前で校舎に向かって叫んでいる。

「お兄さん、恥ずかしいし早くどかないと皆の邪魔に…」

「あんた、邪魔よ。」

「ゲフツ！？」

いきなり蹴られた…。しかも膝裏を。

無残に崩れ落ちる俺。

ちつくしう、いきなり蹴ってくるとはどんな奴だ！？ぜひ顔を拝ませてもらお…

「あれ？由紀か。あ、春香も。おはよう。」

ああ、そういえばこの二人もいたなあ。学園にショックを受けすぎてすっかり忘れてた。

「…早乙女君、おはよう！」

「一樹おはよう。あんたもこの学園なんだね。」

春香が何か言いかけた気がするんだけど…。ま、いいや。

「ああ、俺も今日から桜葉学園の仲間入りだぜ。ヨロシクな！」

つと、そういえばさつきから奥のほうにすごい人が集まってるな…。
なんだろ？

「あ！あそこでクラス発表してるよ！」

真紀ちゃんがそう言うならそうだろう。

でも、俺は職員室に行かなければ行けない！…地図片手にね。だ
って広いんだもん！？迷子になっちゃうじゃんかよッ！！

「本当だ！早乙女君もあそこに名前あるかな？」

「いや、俺は職員室に行かないと。」

そう！俺は職員室に行かねばならない！だから春香のこの悲しそうな顔もどうしようもない…。なんでそんな顔するのさ！？

「そつか…。じゃあ、また後でね！」

「私も中等部のクラス割り見に行きますね。」

という訳で、いったん解散。俺はさつさと歩き出す。

だってね？一応かわいい子が二人ともう一人（由紀）いる訳じゃん？
なんか、メツチャ人に見られてるんだよ…。今もまだ見られてるし。
早く職員室にいこ！

・ ・ ・

ここかなー？一応地図見て来たけど若干不安。

普通さ、職員室とかって看板みたいなものがあるじゃない？ここ、ないんだよね。

コンコンッ

「しつれいしまーす」

ノックと挨拶。これ基本ね。

「「あ…。」」

ドアを開けると、先生は一人もいない。代わりに一人の女の人がある本を読んでいた。

髪色は黒というよりも紺色に近い。そして腰まで伸びるスラッソとしまっすぐした髪。

大人の雰囲気みたいな感じが漂ってる…。すっごくきれいな人だ。リボンの色からして、先輩らしいってこともわかる。

「あなたが早乙女君？」

「え？あ、はい。」

職員室だから、先生がいるとばかり思ってた俺は、生徒がいること

に少し動揺していた。

「私は工藤千尋^{くどうちひろ}。この学園の生徒会長を務めている。好きなものはエビフライとコーヒ―牛乳。嫌いなものは刺身。好きなタイプは強い人・・・だよ。」

自己紹介された！？ここは…俺も返しておくべき・・・！！かな？

「俺は早乙女一樹。好きなものは和食全般。嫌いなものはマヨネーズ。好きなタイプは特にないですね。」

正直、前のことがあるから好きなタイプとかわかんなくなってるんだよな。

だから、そこだけ適当に答えておく。

「ええ！？早乙女君マヨネーズが嫌いななの！？」

「え！？そこに反応する！？」

先輩につい突っ込んでしまった。マヨネーズのにおいが駄目なんだよな。

「ところで、ほかに誰もいないようなんですけど。俺の他に転校生っていないんですか？」

そう、この部屋には今俺と工藤先輩しかいない。俺が早く着きすぎたのかなー？って思ったけど、今はもう9時。始業式も、もう始まつてる時間だろうし（多分）。さっきの俺みたいに迷ってるのか？

「後3人いるんですけど、なにか引越しの整理がどうとかで明日か

「来るそうです。」

「ってこと…。俺含めて4人もですか？」

「そう…なるわね。」

今年はお引越しがブームなのか？だったら俺は流行の最先端を突っ走ってることになるな。

やったぜ！

「早乙女君のクラスは1-Cね。そのうち担任の先生がここに来るからそれまでこれでも読んでおいて。」

そういつて工藤先輩は俺に薄い冊子をくれた。

てれくん 一樹が「なぞの本」を手に入れた！

「先輩これはなんですか？」

「それにこの学校の歴史とか校風とか色々書いてあるから暇つぶしにでも読んで。」

そうかそうか、早速読んでみよう！

なにに？この学校が創設されたのは…

くっだめだ…俺にこの手の本は…ぐう…ZZZZZ。

7話 何で注目されんだろ？てゆうか眠いzzz（後書き）

いやあ、なんとか更新できましたよ。

執筆中だったのを急ピッチで！

そして何でかしないけど少し長めに・・・。

これから、毎回7話くらいの長さにしようかな？

明日こそ更新できるかわかりません。生い立ちの作文もかかなくちやいけないので笑

8話 1年C組みっちゃん先生

ガララッ！

先生が来た。まだ若い男の先生。背も高くめがねをしている。ああー。もてそうな先生だな。

しかし！俺は今絶賛睡眠中なので、気にしない。

「君が早乙女君ですか？」

…先生よりも今の睡眠の方が大事だ。ここで何か反応をしたら負けだ！

「寝てるのかな？寝たふりしてるのですか？」

「……。」

「んー、どうしよつかない。」

ええい！俺のことはあきらめてさっさと行け！

「とりあえず工藤さんにキスでもしてもらっかな？」

「「ええ！？」」

この教師…のほほん系の癖に、いきなりびっくりなこと言っじゃねえか。

思わずリアクションしちゃった…俺の負けだ。

「若林先生？どうしてそこで私が出てくるのかなー？って思っただけど？」

「いやー。早乙女君、起きてたじゃないですか。１－Ｃに案内しますよ。一応転校生扱いにさせてもらうから、最初は廊下で待機。僕が言ったら入ってきてくださいね。」

「あれ？ちよつ、私無視ですかー！？」

「あ、あと教科書運ぶのも手伝ってくださいね。」

なんか工藤先輩可愛そうになってきた・・・。

「…工藤先輩。ドンマイです。」

うなだれてる先輩の頭をそつと撫でてみる。あ、なんかサラサラしてて気持ちいい。

「早乙女君…ありがとう」

お、元気でたっばいな。もう少し、頭撫でたかったけど…。

「寝ばすけな早乙女君？早く教科書をお願いします。」

いつの間にかドア付近にいる…名前なんだ？そういえば、さっき工藤先輩が若林先生って言ってたか。

「って言うか先生！台車なら一人で教科書余裕じゃないですか！」

普通に二人で持っていくには多すぎる量の教科書。それも台車に乗

せてしまえば誰でも運べる。絶対に俺いらない…。

「いやいや、僕ももう若くないですから。こういう仕事はまだまだ若い人に頼みますよ。」

むう、つまり…。

「面倒くさいってことですね？ ま、運びますけど。」

「いやあ、ありがとうございます。若いって素晴らしいですね！」

…なんかめっちゃ胡散臭え先生だな。

・ ・ ・

その後は特に喋ることなく、1・Cと書いてある教室に着いた。

「じゃ、早乙女君はしばらくここで待っていてくださいね。あ、教科書は僕が持ってきますから。」

といって、先生は中に入っていくてしまった。

ドアに耳を当ててちょっと中の様子聞いてみるか。

「えゝみなさんおはようございます。僕はここのクラスを受け持つことになった担任の若林充わかばやし みつるといいます。気軽に「みっちゃん」と読んでくれて良いですよ。」

みつちゃん…。自分で何をいつてるんだこの人は。

「皆、中部からの繰り上がりでしょう。周りが顔見知りばかりでつまらないかと思います。」

いや…。別につまらなくはないだろ。有意義な高校生活送ろうぜ？

「しかし！このクラスに新しくこの学園にやってきた転校生がいます！」

ウオオオオオオオ！！

「先生！転校生は女ですか！？」

「いえ、残念ながら転校生は男ですよ。」

「えええええええ。」

ひ…。ひでえブーイング…。主に男。そこまで女に飢えてんのかよ。

「しかし！女子の方々は喜んでください！性格も素晴らしい！その上イケメン！早乙女一樹さん、入ってきてください！！」

「きゃアアアアアア！！」

…みつちゃん先生！っただけハードル上げるんですか！しかも女子が怖い。このクラスは男女ともに飢えてるのか？

…ともかく行くしかないなっ！覚悟決めろ、俺！！

8話 1年C組みっちゃん先生（後書き）

なんか書きたいことが山ほど…。

まず、今日も何とか続きが投稿できたこと、ホント良かったと思います^^

そしてもう一つ…。

最近読書の幅が広がり、ファンタジー系の小説も読ませていただいているんですけど、すごい文を書くのが上手な人がいてですね…。

なんというか…自分の小説、読みにくいな…って思ってた。

なるべく色々な方に気持ちよくスムーズに読んでもらいたいので、「こうしたほうがいい」、「ここがだめ」等のアドバイスが欲しいです。お願いします。

（追記）

お勧めの小説ってないですかね？

単純に面白いもの、勉強になるもの等あったら教えてくださーいね

9話 友達たくさん欲しいな。

っし！覚悟決めるか！

「ガララッ！！」

生徒たちがいるであろう方向は向かない。決して向かない。という
か向けない！

決してイケメンなどではない俺の顔なんて向けない。
教卓にたどり着いたものの、下を見る俺。

「さあ、自己紹介してください」

この…。誰のせいで自己紹介しづらくなってると思ってるんだよ。
仕方がないから…本日二度目の覚悟決めるか！

俺は勢いよく顔を上げる！そして教室を見渡すと…春香がいた。
ああ、なんだ知り合いいるじゃんか。少し気が楽になる。

「早乙女一樹です。関西の田舎方から引越してきました。都会に
はまだ慣れないところとかあるので、至らないところもあると思う
けどヨロシクお願いします。」

む…静寂が…。

「キヤーー！」

「ワァー！」

「カッコイー！」

「ヨロシクねー！」

「ブラボー!!」

おお、時間差か…。 やっちゃったかと思っただぜ。 ドキッとした、ドキッと。

「それじゃ、早乙女君は後ろの窓際の席ですよ。」

おおお！ 後ろの窓際といったら…。 神に与えられし究極の席！
これで俺は昼寝し放題…

「あ、近いうちに席替えしますからね」

…ちっ。

まあ、黙って席に着こう。
っと、隣の奴と目が合った。

「僕の名前は本堂和輝ほんだわかつきヨロシクね、転校生さん。」

「俺は早乙女一樹。隣になったのも何かの縁かな。ヨロシク。」

隣の席に挨拶しておく。隣って言うっても窓際だし一人しかいないんだけどね。

後で春香にも挨拶しておくかな。

・
・
・

「今日はこれで学校は終わりです。皆さん気をつけて帰ってください

いね。今から部活のある人はがんばってください。」

そういうとみっちゃん先生は風の如くいっちゃった。何か用事でもあんのかな？

「早乙女君？」

「ん？一樹でいいよ。俺も和輝って呼ぶからさ。」

「わかったよ。一樹君、部下に入るか決まってる？」

「いや、そついや全然考えてなかったな。和輝は何か部活やってんの？」

「ふふふ…。よく聞いてくれたね！僕は陸上部に入ってるよ！それでね、全然考えてない一樹君にお願いがあるんだよ。」

全然考えてなくて悪かったな。

「で、お願いって何？」

「陸上部に入って欲しいんだ！」

「えー…。なんで？」

「陸上部は今、初、中、高等部合わせても男子の部員が女子の部員に比べて少ないんだよ！肩身が狭いんだよ！寂しいんだよ！！」

「思いつきりお前の私情じゃねえか！」

てつきり、部員が少なくて部活がつぶれるんだ！とか言ってると思った。

「嫌かな？」

「嫌っていうか…。まだ部活やるかどうかすら決めてないし、どんな部活があるかも知らないからなんとも言えないな。」

「そっか…。」

考え込む和輝。にしても陸上部ね。走るの嫌いじゃないけど、ん。

「い…一樹君！じゃあ、私が部活の案内しようか！？」

この声は…！！？

「あ、春香。部活の案内って？」

言ってから気づいたけど、「部活の案内」の意味がわからないってやばいよね。

「あんた…部活の案内ってそのまんまだと思うけど？」

「由紀もいたのか。部活の案内をしてくれるってことだろ？そのくらい俺だってわかるよ。」

「じゃあ何で聞いたのよ？」

「ワカンネ。なんとなく…かな？」

全く、なんであんなこと聞いたんだろ。

「それよりも、春香。部活の案内してくれるのか？俺はすごい助かるけど、迷惑になんね？」

「ううん、全然迷惑じゃないよ。私の部活、今日は休みだし。」

「んじゃ、お願いするかな。由紀と和輝は？」

「私はバスケ部。ちゃんと今から汗水垂らして練習するのよ。」

「僕もさっき言ったとおり陸上部があるから……。本当は僕が案内したいんだけどね。」

「いやいや、無理するな。」

にしても、由紀バスケ部か。身長もあるし納得だな。

「よし！じゃあ行くか！」

「あ、うん！一樹君待つてよ。」

9話 友達たくさん欲しいな。（後書き）

更新二日？三日？遅れてごめんなさい><

宿題とか（まだ終わらん）、祖父の家に進学の報告行ったり…。

言い訳してもつまらないですよね笑

えっと、最近ちょっと小説書くモチベーション下がってきたけど、

この9話書いてたらまた上がってきました！

でも、連日更新は少しきついかも…。最低でも一週間に一回は投稿するので、どうか見捨てないで読んでやってください。

10話 部活動見学インザ体育館！（前書き）

更新が遅くなったこと、本当にごめんなさい！

入学前は色々忙しいんです…ん？入学した後も忙しいような気がするよ？あれあれ？したら毎日忙しい気が…。

とりあえず、更新が止まらないようにがんばります（どんどんハードル下がってる気がするorz

10話 部活動見学インザ体育館！

とまあ、とりあえず体育館に行くことになった。

春香が言うには体育館は第一体育館と第二体育館があり、第一体育館ではバスケ男女、ハンドボールをやっていて、第二体育館ではその他小さな部活が活動しているらしい。

第二体育館は、少しこの校舎から遠いらしいので
第一体育館 運動場 時間が余ったら第二体育館 と行く事に決めた。

「一樹君？着いたよー？」

お、読者の皆様に説明していたらついたようだ。

「んじゃ、行きますか！」

・ ・ ・

「あちいな…。」

そう、室内で大人数が運動をしているため、熱気が半端ないのだ！
ほんとに！

春香はバレー部の友達に見つけて、仲良く話をしている。

俺は、友達なんてまだまだ少ないから…ん？

「君、見学の人？」

隅っこで壁にもたれかかってたら声かけられた。バスケット部の女の先輩だな。髪は短めのいかにも「運動最高！」って感じの人。

「まあ、一応。」

バスケット部を見学！って訳じゃないしね。だから「一応」って言うていた。

「そうなの！？じゃあ、隅っこじゃなくて真ん中来なさい」

そういうと、先輩A（仮）は俺の手を持ってなんか人だかりに突っ込んでいく。

「ちょ、先輩！？俺他にも色々な部活見たいんですけど！？」

「ん？いいのいいの」

何がいいんだよ！バスケットは体力メツチャ使っから嫌なんだよ！

「皆！イケメン君が見学にきたよー！」

誰がイケメンだ！誰g

「きゃー！カッコイー！！」

「バスケット部に入るの？」

「メルアド教えて！メルアド！」

「…今夜、暇？」

「きみ転校生？」

「俺と愛の道を…」

なんだこいつら…。初等部から高等部まで集まってきて…ていうか、若干気持ち悪い奴がいたな。

「うる…「うるさーい!!」」

ん？俺が言う前に、さっき無理やり引っ張ってきた先輩A（仮）が一喝。

「えー、でも部長が連れて…」

「いいから！練習再開！ホラっ!!」

はたから見えて思うけど、この先輩、自分勝手だな。人を集めておいて煩くなったら散らす。なかなかひどいことするな。

「いやー、うるさくなってごめんね？」

「いえ、気にしませんよ。」

…あんたのせいだけだな。

「あ！自己紹介するね。私はバスケット部の総合部長、城野^{きの ゆかり}縁、高等部3年だよ。」

「俺は早乙女一樹、今日転校してきたばかりの高等部の一年生です。」

「転校生？そういえば、うちのクラスにも来るとかって…」

ん？あの、今日は来れないって転校生のことか？

「ぶちよー！ちょっと来てくださいー！」

遠くの方で城野先輩を呼んでる人がいる。部長だもんな、城野先輩も忙しいんだろう。

「あ、ごめんね。ちょっと行って来る。ゆっくりしてっね」

と言ってさっきの子のところに走っていった。

正直あまりゆっくりするつもりはないしな。そろそろ外の部活も見たいし。

…ん？そういえば、春香何処にいった？

10話 部活動見学インザ体育館！（後書き）

とりあえず更新しました！

訪問PVが2500突破しましたよ！すごい嬉しいですよ^^

俺のバリバリ初心者な小説読んでいただいて光栄です…。これから
も精進しますので、感想やアドバイスなどくれるともっと嬉しいで
す^^

話し変わりますけど、明日入学式ですわ。入学して4日後にはなん
か泊まりでどこか行くらしいですし……。って、友達もまだ少な
いのに泊まりかよ！？みたいな笑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4480g/>

涙のふるさと

2010年10月15日21時16分発行